

## 序

### アカデミック・ポートフォリオ作成の目的

県立広島大学の教員である私が、大学人として自らの実践を振り返り、「①教育」「②研究（学会活動を含む）」「③サービス活動（大学運営・地域貢献など）」の3つの柱における課題を見つめ直すことを通じて、すべての業務の改善を図るためにアカデミック・ポートフォリオを作成する。

ティーチング・ポートフォリオの作成（2016年8月）が、当時の私に「教師としての原点」を思い出させてくれたように、アカデミック・ポートフォリオは「大学人としての私」の骨組みを再認識させ、道を照らしてくれることと思う。そのためにも、これまで行ってきた教育と研究が、「サービス活動」としての大学運営や地域貢献の多くを包含し、密接に関係していることを明らかにしたい。その過程で大学人としての私の「核心」を明らかにし、大学教育改革に関わる業務を遂行するモチベーションを高め、より良い大学運営に貢献する端緒としたい。

このアカデミック・ポートフォリオの読者として想定しているのは、「今の私」と「未来の私」であるが、共に大学を良くしていこうと考える同僚たちにも読んでもらいたいと考えている。ティーチング・ポートフォリオ、そしてアカデミック・ポートフォリオの輪を広げ、内省にもとづく教員の意識改革を進めることこそが、大学教育の課題解決につながると信じるからである。

## 教育

### 1 教育の責任

#### 1) 県立広島大学における人材育成と英語教育

大学における英語教育の目的は何か。学習指導要領に基づく高等学校までの課程を終えた学習者に、どこまでの力をつけていけばよいのか。これは大学の掲げる人材育成目標と密接な関係をもつ。ここでは、私の勤務する県立広島大学における英語教育について考えてみたい。

まず、本学の学則に記された目的と、全学人材育成目標を次に挙げておきたい。（添付資料1）

- ・県立広島大学は、主体的に考え、行動し、地域社会で活躍できる実践力ある人材を育成するとともに、地域に根ざした高度な研究を行い、その持てる資源を地域に積極的に提供することなどを通じて、地域に貢献する知の創造、応用及び蓄積を図り、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。（学則第1条）
- ・県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。（人材育成目標）

ここに記した学則上の目的、ならびに全学人材育成目標に沿って、学士課程全体のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーが策定されているが、その中で全学共通教育の外国語科目に与えられた使命（守備範囲）を記したものが、「全学共通教育科目カリキュラム・ポリシー」に掲げた次の目標である。（添付資料2）

ここでは、実用（語学力）と教養（異文化理解）を両輪と捉えている。

＜全学共通教育の教育目的＞

大学生としての「学びの基礎・基盤」を固め、専門教育と並び立つ「豊かな教養」を身につけます。

＜基盤「外国語科目」の学修目標＞

ア 異文化への関心と理解を深めます。

イ 国際化にともないますます重要視される外国語能力の基礎を育成します。

このカリキュラムポリシーのもとで設定された「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」を私は担当している。

授業の具体的な内容の前に、一点書き加えておきたい。本学は現在、教育改革の最中にあり、その一環として文部科学省補助金「大学教育再生加速プログラム（AP）」のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）に選定され、平成26年度後期より取り組みを続けている。（添付資料3）

地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かし深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者アクティブ・ラーナーの育成を目指す。

私は平成27年度よりAP事業の責任者を務めているが、自身の英語授業の中に、このAPの狙いを極力盛り込んでいる。特に教室内におけるグループワーク等の「参加型学修」の機会をできるだけ多く設けるようにしている。

## 2) 私の担当科目

現在、次の授業科目を担当している。各科目の目標は次の通りである。（添付資料4）

英語Ⅰ（1年前期必修 1クラス20～30名）	英語Ⅱ（1年後期必修 1クラス20～30名）
<ul style="list-style-type: none"><li>・語彙力、文法力を高め、さまざまな分野の英文を正確に理解できる。</li><li>・文章の社会的・文化的・歴史的背景を読み取り、異なる文化に対する知識を深めることができる。</li><li>・自分の意見を平易な英語を用いて表現できる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・語彙力・文法力を駆使し、英文の多読・速読ができる。</li><li>・書き手の意図を的確に捉えることができる。</li><li>・英文読解を通して、文化や社会問題等についての理解を深めることができる。</li><li>・自分の意見を英語で的確に表現することができる。</li></ul>

英語Ⅲ (2年前期必修 1クラス 20~30名)	英語Ⅳ (2年後期必修 1クラス 20~30名)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英文を正確に読み取ることができ、さらに <b>critical reading</b> や <b>presentation</b> などの応用的な読みへとつなげることができる。</li> <li>・ 自分の意見を英語で表現し、相手に効果的に伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 専門分野に関連した学術的な英文を読んで理解できる。</li> <li>・ 大学生として必要なアカデミック・リーディングを中心とした言語能力（表現力を含む）を身につける。</li> </ul>

## 2 教育の理念

上で述べた「責任」を果たすため、日々の授業に力を注いでいるが、その授業を支える「私の理念」について、考えを整理しておきたい。

学習者の内的動機付けがなければ学習は成功しない。そのために教師にできることは限られている。「おもしろい」「やってみよう」「つづけよう」と思わせることだけである。これを私は「お・や・つ」の力と呼んでいる。これが私の理念である。

私は英語を学びたいから今の職業を志し、英語を学ぶことは「おもしろい」と思い続けている。同じことを学生に伝えることができればと思う。学ぶことが「おもしろい」英語、それができるようになればもっと楽しくなるだろう。それが「やってみよう」という行動につながる。さらに、よりよい学び方を示せたなら、きっと「つづけよう」と思わせることができる。

「おやつ」は毎日取らなくても生きていけるが、必要な栄養を補ったり、心を豊かにしてくれたりする。ことばの学びには、おやつのように少しゆるやかな、遊び心があってよい、と思っている。

「お・や・つ」の理念を具体化するため、私は次の5点に留意している。

- ・ 平成14年に広島県立大学へ着任した当初は経営学部、平成17年に旧三大学が統合した後は生命環境学部属しているが、常に一般教養（全学共通教育）の英語必修科目を担当してきた。英語を専門としない学生の、苦手意識や習熟度のばらつきに対応する必要性を痛感する。着任以来、**学習者中心（Student-Centered）**の授業を志向し、「大福帳」（毎授業のコメントを学生と教員がやりとりするシート）を始めることにした。「大福帳」は現在、「コメントシート」と名を変え、今も続けている。（添付資料5）

- ・ 英語以外の専門を持つ学生にふさわしい教材はどのようなものかにも常に気を配っている。学生にとって馴染みの内容であれば、英文の理解も促進される。**背景知識（Background Knowledge）**がものを言うからだ。生命環境学部の授業では、科学分野の素材を選ぶことも多く、教師である私自身の背景知識向上にも役立っている。（添付資料6）

- ・ 英語力にも様々あり、黙々と机に向かって **TOEIC** 等のスコアアップに結びつくこともあるが、共に学ぶ教室には、その場を活かした学びがある。複数の学生と教員が同じ時間と場所を共有する授業そのものがコミュニケーションであり、ゴールもまた、コミュニケーション能力であるべきであろう。意思疎通を図るための4技能（読み、書き、聞き、話す）の向上を目指す**コミュニケーション中心教授法（Communicative Approach）**を基本にしたい。そこでは活動中心に行うことで、「楽

しさを演出する。しかし必ず学んで欲しい中身をしっかりと盛り込むことも重要である。語の連想ゲームを英英辞典の定義に近づけていくゲームや、語呂合わせで英単語を覚えるキーワード法を取り入れると、ことばそのものに由来する「楽しさ」を感じることができる。(添付資料 7)

・こうしたことばの面白さに加え、学ぶことを楽しいと感じるために「達成感」は不可欠である。私は近年、**インストラクショナル・デザイン (Instructional Design)** に関心を持つようになった。「できなかったことができるようになるために、どういう活動をどういう順序で行うか」という点に配慮し、できるだけ細分化された単位で達成感を与え、次のステップに進むデザインをこころがけている。ある意味「計算された達成感」を味わわせる授業設計である。後で述べる **DTR** や **Moodle** は、学習法や教材開発において、その基本に通じる。

・大学で学ぶ英語の究極の目的に、アカデミックスキルとしての英語がある。県立広島大学では、平成 27 年に新しいカリキュラムで共通教育の英語をスタートさせたが、私の所属する庄原キャンパスの必修英語では、その前年から試行錯誤し、**学術的言語技能 (Academic Language Skills)** を目指した授業を展開している。具体的には、批判的な読み、ディスカッション、エッセイ、プレゼンテーションなどを実施しているが、そのための教材選定にも留意している。

以上の 5 点は、次のようにまとめることができる。これらを常に意識し、忘れないように英語の表記を頭字語 (acronym) にするため、並べ替えてみた。すると、**BASIC** になる。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・背景知識を活用した教育 (Background Knowledge)</li><li>・学術的言語技能への展開 (Academic Language Skills)</li><li>・学習者中心であること (Student-Centered)</li><li>・インストラクショナル・デザインの採用 (Instructional Design)</li><li>・コミュニケーション中心であること (Communicative Approach)</li></ul> |
|--|

私の教育理念「お・や・つ」は、この **BASIC** に支えられている。**BASIC** の具体化には、基礎的な (basic) 英語力も不可欠であるが、その中心に位置するのは常に学習者 (S) であることを忘れないようにしたい。

### 3 教育の方法

ここまで述べてきた私の理念をどう具体化していくか。上で述べた **BASIC** に沿ってまとめてみたい。

#### (1) 背景知識 (Background Knowledge)

背景知識を利用した読解・聴解が可能となるよう、学生の専門分野 (生命・環境) に近い科学の話題や最新のニュースを取り入れた教材選定を行う。これまでに、国内外のニュース記事から、農業、動物、食、地球温暖化、感染症や、海外の政治問題などを扱ってきた。平成 29 年度は、1 年生の授業ではスポーツにチャレンジする若者や調査捕鯨、2 年生の授業では **GPS** 衛星、憲法改正や

禁煙法案，効果的な睡眠などを扱っている。(添付資料 6，再掲)

## (2) 学術的言語技能 (Academic Language Skills)

批判的思考，ディスカッション，エッセイ，プレゼンテーションの力を，自分の意見を組み立て，英語で表現する練習を通じて高める。そのために，上記の読み物教材の選定時に，できるだけ意見の分かれる問題を取り上げ，授業中にグループディスカッションを行ったり，ウェブ上の学習管理システム Moodle 上に意見を書かせたりするよう心掛けている。この意見表明や，毎回課題として Reading Log (図書館の英文図書を読んで意見をまとめる読書記録) においては，パラグラフの基本構造に沿って書かせ，論理的な文章構成について意識化させている。(添付資料 8)

## (3) 学習者中心 (Student-Centered)

「おもしろい」「やってみよう」「つづけよう」と思わせる授業の雰囲気づくり (カードゲームによるウォームアップや，グループで行う様々な活動) を工夫する。主体的な学習姿勢を引き出すために，Moodle を電子掲示板のように用いて学生同士が教え合う環境を整えるとともに，コメントシートでニーズを的確に掴むよう努めている。Moodle では，英文記事をプリントで配布し，読解用のテスト問題を少なくとも一つ，あらかじめ作成し投稿することを課題としている。自ら出題するメリットは，問題がクラス全員に公開され，他者に解答を求める手前，確かな理解に基づいた出題を心掛けるようになる，という点である。

## (4) インストラクショナル・デザイン (Instructional Design)

DTR や Moodle を用いたトレーニングなどにおいて，スモールステップの学習設計を行い，達成感を味わわせる。DTR とは，Dictation(書取)，Translation(訳読)，Re-translation(復文)の3つの学習プロセスを組み合わせ，1枚のワークシートで学習可能にした学習法である。(添付資料 9)

一度に扱う短いパッセージをもとに，「書取」「訳読」「復文」に前後して，暗唱，シャドーイング，音読の速読，スライドによる英和・和英学習を行うなど，4技能をフルに使った学習を繰り返し，シートの完成を目指す。「書取」では難しかった英文が，様々なステップを経て，最後にはスラスラと「復文」できるようになる学習に，達成感を味わう学生も多い。この学習法に対しては，コメントシートや授業アンケートの自由記述において，しばしば学生からの好意的な評価が見られる。

音声とテキスト (文字) が揃っている素材であれば，何でも DTR 学習法に利用可能であるが，短い文章であってもかなりの時間を必要とする。Moodle に書取用の動画をリンクしたり，訳読用のスライドをアップしたりするなど，授業と授業外学修課題との組み合わせを工夫するように心がけている。

## (5) コミュニケーション中心教授法 (Communicative Approach)

授業そのものをコミュニケーションの場とし，4技能を駆使する様々な活動を通して意思疎通の力を養う。例えば (2) の項で述べた Reading Log (読書記録) を用いた活動では，まず予習として英文図書を「読み」，その感想を「書き」，授業ではそれに基づいて Book Talk を行って「話し」，同じグループの Book Talk を「聞く」。さらに内容に関する質疑応答や意見交換を行うなど，4技能すべてを用いて双方向性をもった活動を行っている。

コメントシートにも工夫をしている。今年度は、英語6語によるコメントを課し、それに対する私の回答も6語の英文で行うことを貫いている。6語に限定することで、基本的な文法と語彙からなる意見表明を抵抗なく続けられるというメリットがある。

## 4 教育の成果

### 1) アンケートから見た理念と方法の成果

これまで述べてきたような理念にもとづき、それを指導方法という形で具現化するよう努めてきた。そうした授業の結果、私は県立広島大学の人材育成目標の達成に貢献しているのだろうか。

ここでは、上で掲げた私の理念を支える BASIC と指導方法、大学の人材育成目標との関連を示すとともに、その成果を授業アンケート結果から探してみたい。(添付資料 10)

理念	方法	人材育成目標&カリキュラムポリシー	成果を知るエビデンス (授業アンケート)
1) 基礎的英語力	発音・語彙・文法・談話の力 (DTR, Moodle)	・外国語能力の基礎	e) 知識・技能向上
2) 背景知識	専門分野や最新のニュースに配慮した教材の選定	・幅広い教養 ・専門教育と並び立つ「豊かな教養」 ・異文化への関心と理解	c) 課題明示 f) 教材・教具
3) 学術的言語技能	批判的思考, ディスカッション, エッセイ, プレゼンテーション	・課題解決に向けて行動できる実践力 ・地域や国際社会で活躍	c) 課題明示
4) 学習者中心	コメントシート 教室の雰囲気作り 主体的 Q&A	・主体的に考える ・高い志とたゆまぬ向上心	a) 学修姿勢 b) 授業外学修 g) 発展的動機付け h) 学修支援
5) インストラクショナル・デザイン	DTR eラーニング	・大学生としての「学びの基礎・基盤」	f) 教材・教具
6) コミュニケーション中心教授法	4技能の活用	・豊かなコミュニケーション能力	d) 能動的学修

上の表では、理念に基づく方法によって養われると思われる力 (人材育成目標&カリキュラムポリシー) を示し、その成果を知る上で参考となる授業評価アンケートの項目を挙げた。

### 2) 学習者中心の課題

次の表に平成 28 年度前期～平成 29 年度前期の授業アンケート結果を示す。数値は 4 段階評価のうち、3「そう思う」もしくは 4「強くそう思う」と答えた (肯定的に評価した) 学生の合計比率である。以下の数値は、上の理念にもとづく方法が学生にどの程度受け入れられ、その成果がどの程

度自覚されたかを示す目安と言えるであろう。

	理念・方法	H28 前期 英語 I (109 名) 英語 III (73 名)	H28 後期 英語 II (104 名) 英語 III (67 名)	H29 前期 英語 I (22 名) 英語 III (69 名)
a) 学生：真剣な取組	4)	95% 99%	95% 94%	91% 100%
b) 学生：授業外学修時間	4)	63% 74%	64% 78%	55% 62%
c) 授業：課題の明示	2), 3)	99% 97%	100% 99%	100% 97%
d) 授業：能動的学修機会	6)	99% 99%	99% 99%	100% 99%
e) 授業：力が身につく	1)	93% 92%	94% 91%	95% 96%
f) 授業：教材・教具の適切さ	2), 5)	94% 96%	94% 96%	100% 94%
g) 授業：さらに学びたくなる	4)	92% 92%	90% 93%	91% 93%
h) 授業：必要な支援を得た	4)	92% 97%	97% 94%	95% 99%
i) 授業：総合的満足度		89% 93%	92% 87%	91% 96%

多くの項目で肯定的な評価が 90%を超えているが、b) の「授業外学修」は当該期間中 55～78%にとどまっている。g) の「さらに学びたくなる」、i) の「総合的満足度」において、一部 90%を下回っている学期がある。(いずれも網掛け部分)

以下では「学習者中心」という理念に分類した項目（「授業外学修」を含む）について、理念の実現という観点から、それぞれが示す実態を解釈してみたい。

- a) 学生は概ね真剣に取り組んでいる。「やってみよう」という気持ちになっているのであろう。
  - b) 学生の授業外学修については、十分な結果とは言えない。彼らは「つづけよう」という気持ちになっていない様子が伺える。
  - g) さらに学びたいという学生が 90%を超えることから、概ね「おもしろい」という動機付けはできているものと思われる。
  - h) 授業では概ね必要な支援を得たと答えている。コメントシートによるニーズ把握のほか、メールや対面での学修相談に応じることもあり、それらが機能していると考えることができよう。
- 以上のことから、私の授業は概ね好意的に捉えられている項目が多いが、「学習者中心」については、特に授業外における持続的な学習を促す動機付けに十分至っていないという結果であった。

### 3) 同僚からのコメント

今年度より私の授業をできるだけ公開している。同僚には、学生の動きを中心に「参観シート」へのコメントを求めている。

授業は細分化された活動をグループや個人で進めるスタイルで、学生にとっては少々忙しい授業である。私自身、教材や活動が消化不良気味であることや、授業目標と活動の意図との関連について、いくつもの課題を自覚しつつ、「学びを続けさせたい」との思いで新しい試みを行っている。参観者からは、そうした授業者の意図を理解した上での、建設的かつ好意的なコメントを頂戴している。(添付資料 11)

## 5 教育の目標

### 1) 短期的課題

上で明らかになったように、自律的な学修をより一層促すことが重要な課題であると考えます。私自身は英語を「おもしろい」と思い、「やってみよう」「つづけよう」と感じて続けてきた。授業を工夫するのも楽しい。そうした私の「お・や・つ」が、自然に学生に伝わることが理想であるが、実行に移すことは簡単ではない。むしろ目標をより一層明示し、「できなかったことができるようになるには、十分な授業外学修が必要である」ことを繰り返し伝え、学生の動機づけに結びつけていきたい。

私の短期的な目標として、「**シラバスを充実させ、目標と、それに必要とされる学修時間を明示する**」こととしたい。これにより、授業外学修時間を増加させ、それを問う項目への肯定的な回答が常に 80 パーセントを上回ることを早期に実現したい。

### 2) 長期的課題：平和をゴールに

長期的な目標は、学生からの「なぜ英語を学ぶのか」という問いに対し、英語教師として明解に答えられるようになりたいということである。では、その答えとは何か。

英語によるコミュニケーションにせよ、異文化理解にせよ、そこで問われるのは「他者を理解する」ということだ。言葉や文化は異なっても、相手の側に立って理解しようとすることは尊い。これが相手を「おもいやる」ということだろう。この思い遣りの蓄積が国境を、異文化を、世界中の様々な障壁を超えたとき、世界に平和が訪れるのではないだろうか。

#### **「英語を学ぶと、世界中が平和になるんだ」**

この理想を、真剣に語れる教師に、私はなりたい。

2016 年のオバマ大統領広島訪問、2017 年のノーベル賞に ICAN が選ばれるなど、英語による平和への訴えを見聞きする機会が増え、理想は信念へと変わりつつある。平和を語る英語の言葉を教材とし、授業で扱う。そこには、「悲しみを抱えた人々への思い遣り」を促す言葉があふれている。

広島で英語を学び、平和を英語で伝える意義を学生に伝える。これもまた、私たちの大学が掲げる「地域に根差した」教育の姿であろう。私の使命の一つに加えたい。



# 研究

## 1 研究の特徴

私の研究分野は英語教育学であり、英語を教え、学ぶための教材や方法論などを研究対象としている。今日の英語教育界では、海外で発展した理論（例えば第二言語習得論）を取り入れ、日本の教育現場での応用可能性を追求するタイプの研究が盛んである。そうした潮流を押しえつつも、私は幕末明治期以降の英語受容史の中に多くのヒントを見出そうとしている。

日本の英語教育史の中には、適正な評価を得られないまま埋もれてしまったと思われるものが多く存在する。語源を中心に編まれた辞書、発音記号だけで書かれた教科書、会読と呼ばれるグループ討議、復文と呼ばれる原文復元学習法など、今日でも価値を失わない教材や教授法がある。小学校の英語教育や、和訳先渡しといった、今日「新しいもの」として紹介されている実践には、既に明治時代から行われていたものもある。

特に広島のは、明治期に官立外国語学校や高等師範学校が置かれるなど、英語教育先進地であった。原爆で多くが失われたものの、丹念に探せば戦前の資料に出会うことも多い。こうした広島英学の痕をたどり、現代に蘇らせることは私の使命の一つであると考えている。

歴史は懐かしむために存在するだけではなく、未来の指針を描くことにも役立つ。そのためには、時代の異なる資料を共通の尺度で比較し、その流れの本質を理解することが重要である。英語教育の分野では、英文コーパス（電子化された言語資料）をコンピュータで処理することにより、学習語彙の量的比較や、教材の読みやすさの比較が可能となっている。テクノロジーの助けを借りて、歴史から学ぶことが可能となるのである。

テクノロジーの利用はそれだけにとどまらず、学習を支援する道具としても無限の可能性を持つ。LL 教室（Language Laboratory）や CALL 教室（Computer Assisted Language Laboratory）を見ても分かる通り、英語教育とテクノロジーは歴史的にみても親和性が高い。

英語教育を対象とした研究を、私は上の2つの方向、すなわち歴史（伝統）と新機軸の両面から捉えている。そのため、私の研究室のウェブサイトには、Tradition & Innovation（伝統と新機軸）という言葉を用いている。（添付資料 12）

### 1) 伝統（Tradition）

現在の一番の関心は英語教育史である。主に明治期の英語教材を収集・分析し、それ以降の教材との比較を通じて教授法・学習法の変遷をたどっている。その中で興味深いのは、明治期の独習書で示された訳読法は、現在行われている方法と大きく異なっていないという点である。

明治初期の英語教科書として、主に英米の児童用読本が用いられた。その独習用として、ちょうど現在の教科書ガイドのように出版されたものが「独案内（ひとりあんない）」と呼ばれる。独案内は一般的に、本文の各単語の上部にカタカナによる発音表記、冠詞を除く単語の下部には訳語、さらにその下に訳順を表す漢数字が付されている。

次に示す例は、明治5年に発行された『ウィルソン氏英第一リードル挿訳』に記されたものである。

ゼイ	ウィル	ナット	ゲット	ロースト	フワール	ゼ	ボーイ	ノース	ゼ	ウェイ
they	will	not	get	lost,	for	the	boy	knows	the	way.
彼ラハ	アロフ	ヌデ	マヨハ		如何トナレハ	男子ガ	知ル	路ヲ		
					ユエニ					
一	四	三	二		五九	六	八	七		

数字の順に訳語をつなげると、訳文「彼らは、まよわぬであろう、如何となれば、男子が路を知るゆえに」ができあがる。語によっては2回訳す（ここでは理由を表す接続詞 for）ものもあり、「再読」と呼ばれる。こうした漢文の学習に見られるような訳し方は、このままではないにせよ、今なお行われている。学習法が進歩していないということではなく、語順の異なる言語を学ぶ上で、何らかの「原理」が存在していることを示しているのではないだろうか。

このほか、発音・語義・語順のすべてを一冊で学べる「総合参考書」として、独案内には様々な工夫がこらされている。日本語にはない原音をカナで表したり（例えば、t の音は「ツ°」と表記し、little に「リツ°ル」という読み仮名を振るなど）、直訳調の訳文を意識と並記するなど、異言語とどう格闘すればよいかという道筋（原理）を示しているように思われる例が多く存在する。

こうした日本の英語教育における学びの原理を、教材や学習法の歴史的検討を通じて明らかにし、より効果的な教授法・学習法の提案に結びつけていくことを、私の研究の中心に据えている。

## 2) 新機軸 (Innovation)

歴史上の教材に対し、当時存在しなかった「ものさし」をあて、異なる時代間の比較を可能としたのは、コンピュータの進歩と、コーパス言語学の発展である。新しい道具と新しい学問に習熟することで、歴史研究の応用可能性が大きく広がる。

情報通信技術 (ICT) は、教育方法にも大きな変革をもたらした。小さな端末をインターネットに接続して学ぶ方法は、日常の風景となっている。様々なメディアが教育に利用できる今、教材や学習を適切に管理するシステム (LMS: 学習管理システム) を英語教育に導入する研究も盛んである。

私は、歴史研究者の中では比較的テクノロジーに明るく、ICT系の学会では歴史に明るい人とみなされている。どちらか一方だけでは見えてこないものが見える英語教育研究者であることを強みに、今後も研究を重ねていきたい。

## 2 研究に対する他者からの評価

平成 22 年度に日本英語教育史学会賞を受賞した。対象論文は次に述べる「明治期における英語読本独習書の研究：森修一の独案内に見る英語学習の諸相」(2010) である。(添付資料 13)

このほか、論文「学習指導要領『必修語』の起源に関する一考察」(2000) は、英語教育専門誌『英語教育』の「論文紹介」欄に取り上げられた。また、歴史やコーパスを含む、幅広い視野から指導法を論じた編著書『外国語活動から始まる英語教育：ことばへの気づきを中心として』(2014) は、同『英語教育』の書評で取り上げられ、好意的な評価を得た。(添付資料 14)

### 3 発表された成果の代表例

これまでに学術誌に掲載された論文の代表例は、次の3点である。(添付資料 15)

- 1) 馬本 勉 (2010) 「明治期における英語読本独習書の研究：森修一の独案内に見る英語学習の諸相」『日本英語教育史研究』(日本英語教育史学会) 第 25 号 pp.89-111. (査読あり)

明治期の英語独習書「独案内」の特徴から当時の英語指導法の一部を明らかにしようとした論文である。この論文により、平成 22 年度日本英語教育史学会賞を受賞した。収集した資料の一つに勤務地庄原出身の英学者の手による「独案内」(明治 19 年)が含まれていたことから、その出版の背景と内容分析を行った研究である。科学研究費補助金(2012～2014)による独習書研究のきっかけともなった。

- 2) 馬本 勉 (2009) 「ICT を活用した「歴史的」英語指導法の研究 (I) : DTR 学習法導入の試み」『生命環境学術誌』(県立広島大学生命環境学部) 第 1 号 pp.9-23. (査読あり)

伝統的に行われている英語学習法を組み合わせ、ICT の活用によって現代的な学びの方法として有効であることを示した論文である。ここで提案した 1 枚のワークシートによる DTR 学習法は、大学の授業で実施するとともに、中高の教員研修などでも紹介している。上で述べた、伝統と新機軸を組み合わせ、指導法として確立した例である。数年にわたる授業での試行錯誤がこのような形で結実した。

- 3) 馬本 勉 (2000) 「学習指導要領「必修語」の起源に関する一考察」『英学史研究』(日本英学史学会) 第 33 号 pp.73-86. (査読あり)

日本における語彙選定の変遷をたどり、中学校学習指導要領に指定された「必修語」の選定過程を明らかにした論文である。科学研究費補助金(2000～2001)による語彙選定研究のきっかけとなるとともに、私の博士論文の一部を構成している。この論文は、『英語教育』誌(2001 年 11 月号)の論文紹介で取り上げられ、好意的に評価された。

### 4 獲得した研究資金

これまでに獲得した研究資金は、次の通りである。(添付資料 16)

#### 1) 科学研究費補助金

- ・ 2012～2014 年度 基盤研究(C) (課題番号 24520637)  
「独習書の分析を通じた英語学習法の変遷に関する研究」(400 万円)  
(研究代表者：馬本 勉・単独)
- ・ 2003～2004 年度 基盤研究(C)(1) (課題番号 15520358)  
「明治・大正・昭和初期の英語教科書の計量的分析」(350 万円)  
(研究代表者：小篠敏明 / 分担者：馬本 勉・本岡直子・松岡博信・中村朋子)

- ・ 2000～2002 年度 基盤研究(C)(1) (課題番号 12680269)  
「明治・大正・昭和初期の英語教科書の計量的分析」(350 万円)  
(研究代表者: 小篠敏明 / 研究分担者: 馬本 勉・松岡博信・本岡直子)
- ・ 2000～2001 年度 奨励研究(A) (課題番号 12780161)  
「英語基本語彙の選定と評価の基準に関する研究」(210 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉・単独)
- ・ 1997～1998 年度 奨励研究(A) (課題番号 09780191)  
「メンタル・レキシコンを応用したホームページ型語彙学習ソフトの開発」(210 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉・単独)
- ・ 1995 年度 奨励研究(A) (課題番号 07858025)  
「語用論の観点からみた英語語彙指導法の研究」(90 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉・単独)
- ・ 1994 年度 奨励研究(A) (課題番号 06780203)  
「英語コミュニケーション能力を高める語彙指導法の研究」(100 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉・単独)

## 2) 科学研究費研究成果公開促進費

- ・ 2010 年度 (課題番号 228010)  
「幕末以降外国語教育文献コーパス画像データベース」  
<http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/database3/>  
(外国語教育文献データベース作成委員会・研究代表者: 江利川春雄)  
(作成分担者: 馬本 勉・小篠敏明・竹中龍範・田邊祐司)
- ・ 2006 年度 (課題番号 188133)  
「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」  
<http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/database2/>  
(外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会・研究代表者: 江利川春雄)  
(作成分担者: 伊村元道・馬本 勉・小篠敏明・竹中龍範・出来成訓)

## 3) それ以外の研究費助成

- ・ 2010・2011 年度 県立広島大学重点研究費 (高等教育推進)  
「Moodle を用いた『県立広島大学・英語 e ラーニングモデル』の構築」(89 万円・81 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉 /  
研究分担者: 船津晶代・西原貴之・R. スチュワート・片山圭巳・本岡直子)
- ・ 2010 年度 県立広島大学重点研究費 (科研費獲得支援)  
「明治期における英語読本独習書に関する研究」(67 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉・単独)
- ・ 2008 年度 県立広島大学重点研究費 (科研費獲得支援)  
「デジタルコンテンツを用いた発信型英語基本語句学習システムの構築」(104 万円)  
(研究代表者: 馬本 勉・単独)

- ・2006・2007年度 県立広島大学重点研究費（高等教育推進）  
「広島県の英学史資源を活用した英語教育方法の改善」（130万円・56万円）  
（研究代表者・馬本 勉・単独）

## 5 学会誌編集委員・学会役員

現在、私が関わっている学会の中心的なものは次の2つである。これらはいずれも私の研究テーマと密接にかかわっており、その中で会の運営や、紀要の査読と編集に携わっていることは、私の研究を進める上で大きな刺激を与えてくれている。

- ・日本英語教育史学会  
副会長（平成26年度～）、紀要編集委員長（平成28年度～）、紀要編集委員（平成20年度～）、査読委員（平成25年度～）、理事（平成14～25年度）
- ・日本英学史学会中国・四国支部  
副支部長（平成29年度～）、事務局長（平成15年度～）、紀要編集委員長（平成15年度～）、紀要査読委員（平成17年度～）

## 6 招待講演

これまでに述べた研究テーマで行った招待講演は次の2件である。（添付資料17）

- 1) 同志社大学英文学会2016年度年次大会・講演（2016年10月30日）  
「英語教科書の伝統と新機軸：その活用法をめぐって」
- 2) 滋賀大学経済経営研究所 大学における外国語教授法ワークショップ（2015年9月18日）  
「英語指導法の伝統と新機軸」

## サービス活動

### 1 大学委員会・作業部会

平成14年度に着任して以来、様々な委員会業務に従事してきたが、最も大きいものは、総合教育センター副センター長（平成23年度～現在）、および学長補佐（平成27年度～現在）としての高等教育推進、教育改革に関する業務であろう。ここではその2つの役職にかかわる内容について記したい。

#### 1) 総合教育センター副センター長（平成23年度～現在）

この役職は、2年任期で現在4期目を迎えている。各期で携わった委員会等について列挙しておきたい。

平成23～24年度（入試・教育担当）高等教育推進部門長、入試部門長、全学共通教育部門長  
教育システム再編準備室長（平成24年度）

平成 25～26 年度（教育担当）高等教育推進部門長，入試委員会議副委員長  
教育改革推進委員会委員

平成 27～28 年度（教育改革担当）教育改革推進委員長，AP 事業推進部会長

平成 29～30 年度（教育改革担当）教育改革推進委員長，AP 事業推進部会長

平成 23 年度に始まる副センター長業務については，その前年までの役職に触れておいたほうがよいと思われる。私は平成 19～22 年度の 4 年間，庄原キャンパスの学術情報センター長（図書館長）を務めた。長年の司書経験を有する職員のサポートを得ながら，開館時間の延長や視聴覚資料の充実など，図書館サービスの向上に務めた。その間，庄原市立図書館の運営委員を務めたが，当時の市立図書館長が同窓の先輩であったこともあり，一般向けの講演会の講師として依頼を受けたり，所管する庄原市教育委員会との接点を持ったりすることができた。准教授時代に 4 年間の管理職を経験したことは，それ以降の業務にプラスになったと思っている。

平成 23 年度に教授に昇進し，総合教育センター副センター長を務めることとなった。1 期目と 2 期目とでは，2 年間の業務内容が若干異なっている。1 期目は，3 つの部門（高等教育推進，全学共通教育，入試）の長を兼務したが，私の前任者と，ベテランのセンター教員の強力なサポートを得，全学のとりまとめ役を務めることができた。2 期目は高等教育推進部門に専念したが，新たに教育改革推進に関わる業務が加わった。

高等教育推進部門は，全学教務の取りまとめと，FD 活動の推進を担っている。部門長を務めた 4 年の間に，新シラバスシステムの導入，GPA 制度の見直し，成績異議申し立て制度の確立，授業アンケートの見直し（項目の整理と中間アンケートの導入），学部横断認定プログラムの設定などを行った。また，科目ナンバリングの検討に着手した。

全学共通教育部門は，学部を超えて設定された授業科目の円滑な運営を担っている。部門長の期間中に，新たな全学共通教育プログラムの検討がスタートし，その対応に追われた。副センター長 2 期目は部門長を他の教員に委ねたが，その後も，高等教育推進部門長として検討に加わり，平成 27 年度に新しい教育課程がスタートした。

入試部門は作問から試験実施に至るまで，年間スケジュールに沿って様々な業務を行う。上記の 2 部門に比べると，比較的ルーチンで回せる業務が多いが，部門長の期間中にはアドミッション・ポリシーの見直しも行った。その後，推進体制が改められ，副学長直轄の入試委員会議が設けられたことから，私はその副委員長を 2 年間務めた。

上記のように，副センター長として様々な業務に携わったが，平成 24 年度には教育改革へ向けた大きな動きが始まった。私は平成 25 年度より教育改革推進委員会委員を兼務し，様々な制度設計に着手したり，文部科学省の補助金申請などに時間を費やしたりした。

平成 27 年度に教育担当の副センター長は交代したが，私は新設された「教育改革」担当副センター長を拝命し，現在も継続して務めている。学長補佐（教育改革・大学連携）としての業務を，総合教育センターと連携して円滑に進める上での措置である。

## 2) 学長補佐（教育改革・大学連携担当）

平成 27 年度から現在まで学長補佐を務めている。平成 26 年度に選定された文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP 事業：テーマ I 「アクティブ・ラーニング」）の事業責任者として，その

業務を前任者から引き継ぐとともに、全学的な教育改革の推進を担っている。教育改革担当として教育改革推進委員長、AP 事業推進部会長を務めるとともに、大学連携では広島県内を中心とした大学コンソーシアム（連携組織）である「教育ネットワーク中国」の運営委員および高大連携委員長を務めるほか、広島県大学連携推進連絡会やサテライトキャンパスひろしま運営会議に大学を代表して出席している。以下では、教育改革に関する業務についてまとめておきたい。

**教育改革推進委員会**では、高大接続改革に関連した検討を続けている。平成 27～28 年度は、3 つのポリシーの見直しについて協議を重ねるとともに、広島県教育委員会との連携強化を推進した。

**AP 事業推進部会**では、アクティブ・ラーニングを推進するためのイベントや制度作り、学内外へ向けての文書作成、会議ほか、連日走り続けている。3 キャンパス間を車で移動し、直接協議の場を設けることも多いため、本当に走り回っている。かなりハードではあるが、幸い、事業を担当する専門職員に恵まれ、新しいことにチャレンジする喜びを感じながら、業務を行っている。

無論、こうした事業に否定的な考えも学内にはあり、思うように進まないことも多い。説得を繰り返したり、トップダウンで進めたりするなど、試行錯誤の連続である。

AP 事業を中心としたこれまでの教育改革の成果を以下に記しておく。（添付資料 18）

- ・平成 28 年度に行われた AP 事業フォローアップでは、平成 26 年度にテーマ I（アクティブ・ラーニング）で選定された本学の主たる取組を含む 6 項目について「順調に進捗している」との評価を得た。

- ・平成 28 年度末の外部評価委員会では取組全体の評点は 4.0（5 点満点、前年度は 3.7）であった。

- ・平成 28 年度末時点での AP 事業数値目標達成度は、21 の設定項目中、12 項目で達成し、未達成 9 項目中の 4 つは平成 29 年度前期中に目標数値を上回っている。アクティブ・ラーニングの実施率は 74.8%であり、全学的な広がりを見せている。

- ・アクティブ・ラーニング（AL）の広がりには、各学科や総合教育センターの FDer（ファカルティ・ディベロッパー）教員の貢献が大きい。FDer は自身の授業で AL を実施し、組織的な教育改善を役割としているが、平成 29 年度は 49 名の FDer の役割分担を進め、FDer 自己評価ルーブリックを作成して目標設定を行った。各自の役割に応じて基礎力(1～2 点)・応用力(3～4 点)・実践力(5～6 点)のスケールで現状把握し、研修を通じて年度末には全 FDer が「実践力」に到達するよう求めている。

- ・平成 29 年度は、FDer 間の授業ピアレビューを積極的に進めている。前期は 31 名の FDer が 60 授業を公開し、41 名が参観した。後期はさらに増加する見込みである。

FDer の活動が活性化していることは、夏期休暇中に実施した FDer 実践報告会（38 名の FDer が、計 42 の実践をポスター発表）の様子からもみてとれる。これらを通じ、組織的な教育改善の質が向上しつつあることを実感している。

- ・従来より三原キャンパスで行ってきたティーチング・ポートフォリオ（TP）作成ワークショップを、昨年度より FDer 養成の一環として全学的に実施している。（平成 28 年度「第 3 回 TP ワークショップ」、平成 29 年度「第 1 回 TP 更新ワークショップ」）。現在、全学で TP 作成者 18 名、うち更新者 12 名、メンター経験者は 9 名となった。TP 作成者は、自らの授業改善の効果を実感しており、その多くは FDer として教育改革を牽引している。

## 2 地域貢献活動

私の地域貢献活動は、英語教育の専門家としての活動と、英学史研究の成果を中心に一般向けに開く公開講座からなる。(添付資料 19)

英語教育の専門家としては、これまでに 6 回 (2009～2010 年度, 2013～2016 年度), 教員免許状更新講習の講師を務めた。このほか、授業研究会における指導・助言や、教育センター等における研修会の講師を務めてきた。

英学史に関する講座としては、広島県内の英学史について調査した内容をもとに、庄原英学校をはじめとする学校史、明治期の教科書や独習書、大正期の辞書などをテーマに話した。毎年度末に庄原キャンパスを会場に開く「言語文化生涯学習講座」の企画と講師を担当しているほか、広島市立大学との連携公開講座においても講師を務めた。

このほか、庄原学術情報センター任期中に自治体から依頼を受けて行った活動として、次のものがある。

- ・安芸高田市向原町生涯学習センター等基本構想策定委員会 委員長 (平成 22 年 8 月～平成 23 年 3 月)。図書館やホールを含む生涯学習センター構想のとりまとめ。
- ・庄原市図書館協議会委員 (平成 19 年 10 月～平成 23 年 9 月)。市立図書館の運営にかかる協議。

## 専門的活動および目標の統合

### 1 教育・研究・サービスの互いの連携・寄与

#### 1) (教育 ⇔ 研究) 一心同体の教育研究

教員養成系学部で学び、卒業論文と同じ指導教官のもとで大学院での研究をスタートさせたこともあり、私の教育と研究は極めて密接な関係にある。教えながら研究テーマを探り、研究成果を授業に応用することを繰り返している。英語教育の歴史であれ、ICT であれ、教育と研究の成果に共通部分が多い。具体的には次のような関連を見出している。

- ・英語指導法の改善を図る問題意識が、英語教育学研究のテーマと密接に結びついている。
- ・研究で明らかになった伝統的な指導法を、ICT と組み合わせて授業に応用している。

#### 2) (研究 ⇔ サービス) 研究はマネジメント

これまでの研究成果のうち、直接学生の教育に反映させているもの以外に、地域貢献活動 (一般向け公開講座) に活かしているものがある。教科書や参考書の歴史など、実物とともに紹介すると、昔を懐かしんでもらえる。このほか、研究の心構えとサービス活動との間に、次のような関係を見出している。

- ・歴史研究の過程で、「無いことを証明するのは難しい (一方、有ることの証明はただ一つの事例を見つければよい)」ことを痛感しているが、これは説得力のある会議資料 (成果を説明する資料など) を作成する上でのヒントとなっている。
- ・PDCA サイクルを意識して学内業務を行うことにより、論文におけるエビデンスのあり方を強く意識するようになった。



### 3) (サービス ⇔ 教育) もう「雑務」とは呼ばせないサービス活動

大学において「教育・研究は最優先」というのは基本であり、それ以外のサービス活動はしばしば「雑務」と称される。だからと言って雑にして良いわけではなく、雑にならないよう心がけておくと、その仕事を通じて大切なことを教えられることも多い。教育・研究活動に専念したいからサービス活動に消極的になるのではなく、サービス活動から得られるものを積極的に教育・研究に役立てていくことが重要であろう。私は次のようなメリットを感じながらサービス活動に向き合っている。

- ・大学運営に関わることで、一つ一つの授業が人材育成目標にどう結びついていくか、意識するようになった。
- ・自治体と関わる地域貢献活動を通じて、地域の持つ教育力について考えるようになった。
- ・授業実践で積み重ねたものを、大学における環境整備や仕組みづくりの具体的な提言として発信することができるようになった。

このように、サービス活動は決して「雑務」などではない。もし「雑務」と呼ぶ人がいたら、それは古い大学観のもとでしか通用しない考えであることを伝えたい。

## 2 専門的な成果3点とその成果が特筆すべきである理由

ここでは、私の主たる成果として、教育、研究、サービス活動より、それぞれ一つ挙げてみたい。

### 1) 授業改善とチームワークによる教育力向上

これまで一貫して学生の動機づけと英語力向上の手助けを続けてきた。授業を計画し、教材や活動を準備することに対し、私は非常に前向きな気持ちで取り組むことができる。これは授業を通して、私自身が学び続けることができる喜びを感じていることによる。

平成14年度に着任して以来、現在勤務する大学では、全ての授業で毎回、学生のコメントを回収し、それぞれに一言コメントを返す「大福帳」（現在は「コメントシート」）の活用を16年間続けてきた。学期末の授業アンケートの結果を待たずして授業改善のヒントを得ることができるだけでなく、学生の様子（出欠席や授業に向き合う態度など）をいち早くキャッチできる。簡単な調査や、英語力向上のツールとしても使える。このやりとりをきっかけに、数えきれないほどの小さな改善を続けてきたことは、私の小さな誇りでもある。

個人の授業改善に加え、同じキャンパスに3名しかいない英語教員間では、常に協働を心掛けてきた。TOEICの導入、CALLの活用、習熟度に配慮したクラス設定、多読の推進、批判的な読みの実践など、キャンパスの全学生向けに取り組んでいる多くのことから、3名の協議の中から生まれた。学生一人ひとりの学修状況を共有し、授業外で個別指導の機会を設けるなど、教育力を高める努力を続けている。非常勤講師にも理解を求め、協力を仰いでいる。理系の学部であり、英語に苦手意識をもって入学してくる学生も多いが、総じて授業態度は良く、皆真摯に向き合っている。TOEICで高得点を取ったり、留学生と積極的に英語でコミュニケーションを図ったりする学生も増えてきたことは、この積み重ねの成果であると考えている。

### 2) 明治期英語教科書独習書研究の独創性

明治期に用いられた英語教科書の独習書研究において、私は網羅的に資料を収集し、それぞれの

特徴を語れる数少ない研究者であることを自負している。上で述べた科学研究費補助金による「独習書の分析を通じた英語学習法の変遷に関する研究」においては、現存する多くの実物資料を確認し、類型化を試みた。上で述べた「独案内」という独習書に加え、(独案内で示された)各語の訳語を並べ替えた訳文を列挙した「直訳」と呼ばれる書物の特徴や、カナによる発音表記のみ記した「音読」、語義を列挙した「字書」、現在の英文解釈参考書に近い「講義」といった、数多くの独習書の分析を続けている。時代とともに、独習書の形態や記述内容にも変化が見られる。単語単位からフレーズ単位での訳が増え、上で述べた「再読」が減少することなどはその例である。そうした独習書の変遷から日本の英語訳読史解明の糸口を探り続け、その成果は学会での研究発表や公開講座の場で頻繁に世に問うている。独習書の記述内容は多岐にわたり、非常に手間のかかる研究であることから、このテーマを扱う研究者は僅かである。その意味で、私はやや異質な英語教育研究者かも知れない。ただ、それだけ独創性を保った研究を続けているという思いはある。

### 3) AP 事業推進を通じた大学教育改革

サービス活動のうち、もっとも顕著な成果は、AP 事業の責任者として、学内のアクティブ・ラーニングを牽引(先頭に立って推進)していることだろう。事業期間 6 年(実質 5 年半)のうち、3 年間分の成果は上で列挙した通りである。取組の成果は、高等教育関係のフォーラムやセミナー等の場において、積極的に発信を続けている。(添付資料 20)

教育改革の成果は、目標数値の達成として目に見えるものだけではなく、構成員の意識の中に、じわじわと広がっていることを実感している。まだ道半ばではあるが、事業開始時から変わったことが数多くある。これは事業推進関係者ばかりでなく、全学の教職員と共有したい成果である。

## 3 大学教員としての 3 つの目標

大学の掲げた使命を真に果たすため、そこに集う学生・教職員が常に輝き、前向きな姿勢で学修・研究・教育・大学運営業務に取り組むことができるような環境作りが重要である。そのために、私自身の指針として、次の 3 点を掲げ、教育・研究・サービス活動のすべてにおいて、それらが果たせるよう努めたい。

### 1) 対話的 (Communicative)

ことばの教育において、対話的な学びは不可欠である。もちろんそれは授業に限らない。研究においてもサービス活動においても、対話が業務の遂行に大きな役割を果たす。

### 2) 学術的 (Academic)

学術的であるのは研究に限らない。対象が初年次の学生であれ一般の年配者であれ、研究成果から得られたものを授業や公開講座の場で伝えるという意味では、教育もサービス活動も極めて学術的な営みである。

### 3) 責任ある (Responsible)

業務に行き詰ったとき、しばしば自分のどこかに「逃げ」の姿勢が見える。何から逃げているか、それは「責任」である。管理職になって 11 年が経過し、さすがに覚悟を決めることを躊躇しない

場面は増えてきたが、まだ不十分であると感じる。

ここで「理想の上司」について記しておきたい。これまでの経験から、私が理想とする上司像は、「多くを私に任せてくれるが、うまくいかないときは自身の責任として引き取り処理してくれる」という極めて身勝手なものだ。ただ、これまでに何度か、こうした上司に出会った。私は幸せ者である。任せることも、引き取ることも、彼らの「責任ある」姿勢の表れであったと思う。(アカデミック・ポートフォリオの作成過程で、私の内側から最も強く浮き上がってきた言葉が、この「責任ある」というものであった。)

私の目標は、上で述べた「対話的」「学術的」「責任ある」という3点を、教育・研究・サービス活動の全ての中で実践(Practice)することである。「3つを全ての中で」というのは、「言うは易し、行ふは難し」であろう。それを常に念頭に置きつつも、具体的には、「対話的」は教育、「学術的」は研究、「責任ある」はサービス活動の、それぞれに対応させる形で、3点の具体的な目標を述べてみたい。

### ① 対話的：教師として、対話のある授業を目指す

教育において、常に対話の成立する授業を心掛けたい。私の授業を参観した同僚から「(学生は)交互に話しているが、対話とは言えない」というコメントがあった。言葉のやりとりだけで、本当の意味でのコミュニケーションが成立していなかったということだろう。それを形にするにはどうすればよいかを常に考え、工夫し、学生にそれを実感させる授業を実践したい。

そのためには、事前の準備をしておけば話せるという活動にとどまらず、常に聞き手とのやりとりの中から自分の考えを組み立て、それを表現する機会を設ける授業にしていきたい。このことを通じ、真に「能動的な学修」と呼べる授業を追求したい。

具体的な目標として、授業評価における「能動的学修機会」の項に対する肯定的評価を100%にし、加えて「満足度」を100%にする。

### ② 学術的：研究者として、英語教育史研究の進展に貢献する

これまで積み重ねてきた研究を、しっかりと論文の形でまとめ、質量ともに充実させていきたい。大学院時代を含め、研究者歴は31年となるが、その間に執筆・出版された著書・論文は、共著を含めて46編となる(予定を含む)。(添付資料12, 再掲)

ここ数年は学内業務に追われていることを言い訳にして、論文数が伸びていない。こんな自分に歯がゆさを覚えている。今回のアカデミック・ポートフォリオを機に、目指すべき研究のゴールが明らかになってきた。日本の英語教育史における独習書の研究を極めることである。それは結果として英語教育の発展をもたらすと信じている。

そのための目標を量的に設定したい。常に研究を前に進め、毎年学会で研究発表を行うとともに、論文を2編以上出す。還暦を迎える2024年には、合計論文数を60編にする。

### ③ 責任ある：大学人として、職責を全うし、大学教育を改革する

サービス活動において、特に現在、学長補佐として担っている教育改革を推し進める責任をどう果たしていくか。上で述べたAP事業(大学教育再生加速プログラム)の数値目標を達成し、成果

を挙げることはもちろんであるが、表面的な結果ではなく、大学構成員の内面からの変革が必要であると考えている。

これをもっとも効果的に進めるのが、ティーチング・ポートフォリオ (TP) であると信じる。私は、学内に TP の輪を広げ、さらにアカデミック・ポートフォリオ (AP)、スタッフ・ポートフォリオ (SP) を学内に浸透させていくよう努めたい。教職協働の機運を高めるためにも、これらを全学的な取り組みとして推進したい。

具体的には、学長補佐の任期中(平成 30 年度中)に再度、TP ワークショップを学内で開催する。同時に毎年実施する環境を整える。それを通じ、学内の TP 作成者数を、2020 年には合計 30 名以上にする。

## おわりに

昨今の大学改革においては様々な数値目標が示され、その達成に向け膨大なエネルギーが費やされる。学生も教職員も「頑張る」のだが、みんなが「疲れている」。構成員の頑張りを無駄にせず、好循環をもたらすには、一人ひとりが前向きに取り組める環境作りが重要である。

私は執行部の一員として目標達成を牽引する立場にあるが、同時に「現場の教員」として学生や教職員と身近に接している。彼らがどのような思いで取り組んでいるか、その過程を理解し、サポートすることも私の重要なミッションと考えている。

構成員のモチベーションを高め、前向きな取り組みを可能にする大学にする。「できない」理由を自分以外の何かに求めるのではなく、「できる」ことを一つ一つ形にしていく。人と人の間に立った粘り強いコミュニケーションも必要である。たいへんな労力ではあるが、充実感を味わうことも多い。

幸いなことに、私は好きな仕事のできる職に就くことができた。好きな仕事が続けられる環境は人任せではなく、自らの手で作っていきたい。その思いを職場全体に広げることができれば、よりよい大学となり、学生も教職員も輝き、社会の信頼に応えられる成果をあげられよう。

そのために、「対話的 (Communicative) ・学術的 (Academic) で責任ある (Responsible) 実践 (Practice)」を続けたい。これもまた忘れないよう、頭字語 (acronym) で CARP と覚えることとする。

私自身の「お・や・つ」の力を信じ、CARP のような機動力と粘り強さを発揮し、使命を果たしていきたい。

2017 年 12 月 26～28 日

アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ  
(大阪府立大学工業高等専門学校) において作成